

芝浦工大 正員 石井忠一郎

I. まえがき

伊勢湾台風による被害を大きくした要因は流木の暴流によるところが大きかった。東京下町低地再開発の計画に際して、伊勢湾台風災害時の流木被害を考慮し、貯木場の移転を含めた流木対策が重要視されている。そこで過去の名古屋港と東京港の特に高潮水害による流木の状況を把握し、これらと比較検討することにより高潮対策および再開発計画の資料とすることとを目的とした。

2. 貯木場の沿革と災害史

(1) 名古屋港

名古屋港年表	
慶長16年(1611) 9/	太天堀開きく工事完成堀川竜の口へ熱田、符入津可能及び熱田貯木場建設
慶長16年(1611)	熱田より白鳥を経て築城地へ下まで舟入開きく工事着手(完成後 堀川と称す 延長3.780間、中12間〜48間、水深5尺9寸)
寛永6年(1629)	貯木場(白鳥)整備完成
慶安2年(1649)	熱田新田完成、堀川西岸を貯木場とする
万治3年(1660)	高潮、白鳥貯木場より大量の流木あり、被害大
明治22年(1889)	堀川下流の白鳥貯木場、御料局の管轄となる
大正元年(1912) 9/3	大暴風雨、高潮来襲(風速28.2m、最高潮位15.33尺) 各埋立地床土浸水3尺、船舶、港湾施設その他被害大(浸水面積 84万坪)
大正2年(1913) 10/4	熱田貯木場完成(名港貯木池、約4千坪)
大正4年(1915) 1/5	熱田貯木場完成(貯木場南地、約2万坪、その後南地計95.951坪に拡張)
大正5年(1916) 1/8	白鳥取開業(木材専用港)
大正10年(1921) 1/26	大暴風雨高潮来襲(瞬間最大風速33.4m、埋立地床土3尺浸水約80万坪)
大正10年(1921) 1/31	白鳥貯木場拡張工事完成(46,900坪、うち水面28,200坪、陸18,700坪)
大正14年(1925) 5/5	加福貯木場完成(水面88,000坪、陸上62,000坪)
昭和元年(1926) 1/1	木材整理場(茅八号地西方)建設工事着手
昭和2年(1927) 8/	茅八号貯木場一部完成、本船1隻分積木材7,000石入符
昭和3年(1928) 3/31	茅八号埋立地完成(244,267坪)
昭和3年(1928) 1/3	木材整理場完成(茅八号地西方水面積55,500坪)
昭和5年(1930) 3/31	名古屋港改良工事完成(危険物置場、茅九号埋立地及木材整理場)
昭和16年(1941) 3/31	堀川に符緊留棧橋使用廃止

上記年表でみるように、名古屋港における貯木場形成の経緯と災害は、密接なかわりをもってきた。

明治31年の築港に際して計画された貯木場施設は、大正元年に深くは流木被害を契機に再編の機運があり

大正2〜4年に熱田貯木場が建設された。ところが大正10年、再び高潮による深くは流木被害が発生し、このため更に大正14年に加福貯木場を設置、昭和8年には従来の災害経験を生かしたモデル施設としての茅8号埋立地完成した。昭和34年の伊勢湾台風は、稀有の高潮とはいえ、木材の流出が災害を決定的なものとし

た。とくに、流出した木材は、直接海に面し、全国オーストリア第8号貯木場のものが中心となり、家屋破壊や人命損失の最大要因となった。はたオーストリア第8号貯木場のほかには、港頭の名産木材整理場の流出木材も多かった。これに反して、河口より上流側の加藤貯木場、名産貯木場では流出木材が少なく(流失率30%)、被害もオーストリア第8号貯木場の影響を受けた白水地区に比してはるかに軽いものであった。名古屋港における貯木場の形成と災害史によれば、海に向って貯木場が進出し、最先端の貯木場ほど深く被害を蒙らせた。

(2) 東京港

江戸開府当初、幕府から与えられた江戸城の大手前にある八代州河岸で木材の取引が行われていたが、寛永13年(1636)に江戸城拡張によって一部の寺院、武家屋敷と共に移転した先が日本橋本町本町辺りで、明暦3年(1657)江戸開府以来の大火で江戸市内の大半が焼失し(10万人以上の死者が出たと言われる)、その復興のため隅田川以西にあった多数の寺院と深川、本所方面へと移転する。これと同時に貯木場も本所、深川、八丁堀、壺岸島、浅草や深川本木場へ移地を求めこへ移る者もいた。しかしこの本木場附近も諸侯が中屋敷、下屋敷の地として進出する様になったので猿江に移り、そして元禄14年(1701)本場に移転以来、今日迄首都の発展と共に本場木材の地として全盛を遂げてきた。

東京港における過去の高潮を伴った代表的な水害を挙げると、延享8年(1680)、寛保2年(1742)、寛政3年(1781)、文政6年(1823)、安政3年(1856)、明治30年(1897)、大正6年(1917)、等がある。このうち寛保2年の大水害は江戸時代の関東大水害とされているもので、高潮もさることながらむしろ利根川や荒川の破堤氾濫により、浅草、下谷から江東地区一帯を泥海と化した。しかし最大氾濫をみせながらも材木の流出は見られない。安政3年の大水害は高潮としては江戸時代最大といわれ、芝高輪、品川、洲崎等の海岸は人家の被害が大きく、本所での出水は床上まで及んでいる。この時の被害は前年の安政2年の大地震による災害よりはるかに深刻なものと言われる。この災害では暴風雨が伴い、風と氾濫流により倒壊家屋、橋梁流失、船舶の破壊などが著しい。また仙谷堤を中心とする繋留木材の流出も被害を大きくしている。この木材は、安政2年の大地震後の木材需要の増大にからみ、堀筋に浮かべてあった筏の流出といわれ、いわゆる貯木場からのものではない。安政3年の高潮災害を除いては、流木による災害の拡大がほとんど記録されていない点に特徴がある。

3. 大正6年高潮災害

大正6年の高潮水害は、東京港防潮計画の契機となっている。高潮は午前3時49分と午前5時30分に2回あり、2回目は満潮位と重なり最高潮位AP 4.18mを記録した。特に品川、月島、洲崎より江戸河口に至る沿岸一帯は高浪にあえかれ、死者は小松川署管内で509名を記録し、このうち区部における死者は113名を出す惨事であった。この時の各地の浸水状況を見ると月島では道路より2.4mの浸水、洲崎、平井附近では道路より2.0mの所が多く軒を浸した。本所町丁目のあたりでは土間から1mの浸水、羽田方面では地盤が低い所では道路より1.8mにも達している。江東地区では全般に床上1mの浸水があった。一方東葛飾郡地域では床上30~50cm、行徳では床上60~90cm、浦安では特に2m以上の浸水を見た。又隅田川筋では、京橋、日本橋、浅草、下谷に大きな被害を出した。この高潮水害は広範囲にわたる浸水をもたらしたが、とくに死者313名を中心に東葛飾郡の被害が著しかった。この高潮災害の特徴として、氾濫地域内に位置している本場を中心とした材木の流出被害の少ないことがあげられる。流出した木材のほとんどは、本場町より東の堀、運河に繋留されていたものに限り、貯木場からの流出はない。海に向って発展してきた名古屋港の貯木場形成経緯と水害史と比較してもっとも大きな特徴といつて良いだろう。

参考文献

名古屋築港誌、伊勢湾台風と臨海都市、名古屋港史、東京市史稿、本場の歴史、江東区史、墨田区史、中央区史、その他